

竺二 法護の『普曜経』の翻訳における

韻文識別のエラーとその原因

岡野 潔

竺二 法護は、普曜経を翻訳した時、梵語原本に含まれていたことが確実な韻文九三二偈のうち、四二四偈で、韻文に訳すべきを散文として訳してしまふ誤りを犯した。なぜ韻文が半分弱も韻文として識別されなかったのか。

法護の手にした梵語写本には当然、韻文でも改行せずじびしりと文字が書かれてあったに違いない。そのため、原文を朗唱して見なければ、韻文かどうかはわからない。彼の翻訳スピードは異常に早かったと思われるが、恐らく一々原文を朗唱してみることなく、すぐさま口頭で漢語に翻訳していったと思われる。その性急さが彼に韻文を多く見落とさせたのであろう。法護は訳出の際、偈頭の開始を告げる導入文の有無を目印に、韻文かどうかを判断していたふしがある。韻文の導入文が目印に留まれば、彼は韻文と判断したが、導入文が無かったり、導入文に *satathiti* と記されていない場合は、気付かず散文のまま読んでしまうことが多かったことが、導入文の有無と法護の韻文の識別率との、密接な関係から確認できる。韻文の前に導入文がある場合、訳者が正しく韻文と識別した箇所は全体で六二箇所であるのに対し、誤って識別した箇所は一六箇所であ

る。一方、導入文がない場合、訳者が正しく韻文と識別した箇所は三箇所であるのに対し、誤って識別した箇所は三一箇所である。この数字から、法護は韻律を吟味する手間を省くため、偈頭の導入文の有無によって、韻文かどうかを判断して訳すことが多かったらしいことがわかる。

また、かくも韻文の識別率が低い理由は、作品が韻文と散文とが交じり合うチャンプー的な様式であるせいもあるが、韻律の雑多性に起因することも大きかったと思われる。普曜経には、三〇余種もの韻律が用いられており、中には韻文であるただだちに見抜くのが厄介な韻律も多く含まれていた。そのため韻律の種類によって、識別率に高低の違いが出てくる。韻律の種類ごとに識別率を調べると、韻律名不明のブラークリト的な珍しい韻律や *mahanalika*・*caṅḍavyūṭṭipāyāta* を始めとする長い韻律は、韻文としての識別率も悪くなる全体的な傾向が見られる。また、普曜経の原典で頻繁に使用されている韻律であっても、法護自身に得手と苦手とがあったようで、識別率が良いものと悪いものとがある。

類出する韻律で、識別率の成績のよいものは *tristubh-jagati* と *vaktra* と *brāh* である。 *tristubh-jagati* は二六箇所七二偈のうち、六箇所二三偈のみで、識別を誤っている。正解率は八二%。 *vaktra* は一四箇所七〇偈のうち、五箇所一八偈で、識別を誤った。正解率は七四%。 *brāh* は二二箇所三二二偈のうち、五箇所七五偈で、識別を誤った。正解率六六%。これらの数字は、法護の全体の韻文識別率が五五%であったことを考える

と、かなりよい。これら三種の韻律は最もなじみ深い韻律であるため、法護もこれら三種についてはすぐ見抜けたらしい。逆に、類出の韻律であるにもかかわらず、識別率の悪い、彼の苦手な韻律に、*puspiagra*がある。九箇所六三偈のうち、六箇所四三偈で、識別を誤った。正解率三三%。(puspiagraの識別が悪いのは *ardhasamavrita* であるためか、あるいは *hatta-chandas* に韻律が極めて近いためだろう。 *natrachandas* 類は大体識別率が悪い。)

他に普羅經の原典で類出する韻律なのにもかかわらず、識別率が全体の平均値程しかないものに、*vasantika* と *manini* と *sardulavikridita* がある。*vasantika* は三七箇所一八〇偈のうち、二〇箇所八六偈で、識別を誤った。正解率は五二%。それに似た韻律である *manini* は七箇所四三偈のうち、三箇所二三偈で、誤った。正解率は四七%。*sardulavikridita* は一七箇所七〇偈のうち、七箇所三三偈で、識別を誤った。正解率は五三%。これらは技巧的で長い韻律であるために、よく出会うにもかかわらず、法護にはなかなかカリズムが掴みづらかったであろう。(本稿は文部省科研費補助金の成果の一部)

『六祖壇経』の五本、七冊について(六)

長嶋孝行

敦煌本『六祖壇経』を敦煌原本、敦煌鈴木本、敦煌宇井本の

三冊として、その他は大乗寺本、興聖寺本、高麗本、宗宝本の四本での計七冊である。その五本、七冊のうち、本論は敦煌本第三十三節、無相滅罪頌から対較、考察を試みるものである。無相頌の本節は後世の本に比べて僅かに増補されている。聊か表現方法は違っているが、内容は殆ど同じである。

具体例としては敦煌本の愚を迷、業を悪、大師を五祖としている大乗寺本以後の本は、その内容を解り易くしている。しかし、敦煌本の三毒悪縁とある具体例を大乘以後の本はやや抽象的に、離諸法相と逆な説明にしている箇所がある。また、大乘以後の本は頌の中にある頓教法を得見性として、後世になって見性が頓教に変わって唱えられてきたことを物語っている。次に原本の誤字を各本が競って訂正している傾向が見受けられる。

即ち、敦煌原本は句読点のない白文であったのを、後世の『壇経』の編者及び研究者が句読点を付け、或は内容の同じ部分を集めて章節に分類して記録したものである。従って、本節の末尾の段のように、ある節から次の節へ移行する場合の接続詞的な文章が補添されざるを得ないと考えられる。故に、敦煌本を切断して再編集したように考察される後世の本にはこうした文が散見されるのである。第三十四節、修福与功德別。本節は後世の本に重要な相違点が認められる。即ち、大乗寺本、興聖寺本は「爾時」としているが、高麗本は「次日」として、一日以上に亘って六祖の説示が行われたことを記載し、宗宝本は「一日」と記している。しかし、説示の内容は各本とも同じと認められる。次の段は、西国第一祖達磨では意味の違う敦煌本を大